

Vol. 24, no. 2

昆 蟲 (KONTYŪ)

1. V. 1956

岩に静止するオジロサナエ

朝比奈 正二郎

枝 重 夫

Stylogomphus suzukii resting on the rock

By Syôzïro Asahina

and

Shigeo Eda

本種は邦産サナエトンボ類のうちで、相当稀なものであるが、それは山間の溪流に幼虫が棲息し、成虫は他のサナエの羽化時期よりもずつとおくれて、6・7月の頃に羽化して出て、更に又成虫は樹上に去つて、水辺には産卵時期にしか姿を現わさないためであろう。

写真は成熟した雄で、溪流中の岩石にとまり、雌の飛来を待つものの姿である。尾端を特に持上げているのは、近似のヒメサナエにも時に見られる所で、尾端の附属器が白色であることと、雌を待つ姿勢であることは何か関連がありそうである。

この種類は最初 *Gomphus* 属のものとして記載され、朝比奈 (1950) は北米の *Lanthus* 属に移したが、Chao (1954) の云う様に、むしろ印度ダージリング地方及び屋久島・奄美大島並びに南支那、更に北アメリカ (1種) にそれぞれ代表を有する *Stylogomphus* に含ませた方が妥当であろう。この種オジロサナエは、本州 (東京、京都、神奈川、静岡、大阪、長野、茨城、和歌山、愛知)、四国 (徳島、高知、香川、愛媛)、九州 (大分、福岡) 等に産し、可なり分布はひろいが、主として暖帯日本の低山地の小流のみに局在して産し、個体数もあまり多くない。Chao は台湾からも記録している (2♂) が、距離の関係から筆者は多少疑いを持つている。

この写真 (A) は 1955 年 7 月 29 日、(B) は 8 月 24 日、筑波山千手沢 (約 300 m) にて撮影したもので、(A) では特異な姿勢と (B) では翅胸側面の Y 字紋が明瞭に示されている。

This is a tiny Gomphid dragonfly and is one of the rare species in Japan, being confined in small stream areas of steep mountain valleys and appears on wing late in our Gomphidae-season. The newly emerged insects ascend high up the trees growing over the valley and only occasionally come down to the water during their breeding period.

This species was originally described by Oguma as *Gomphus suzukii* and later transferred by Asahina to the genus *Lanthus*, but we are now inclined to agree with Dr. Chao (1954) who placed this species in *Stylogomphus* which has representatives from North India, North Ryukyu Islands, South China and in one species from North America.

In this country this species has been recorded from Shikoku, Kyushu and western part of Honshu. We are slightly in suspicion if Formosan specimens recorded by Chao are exactly identical with Japanese ones.

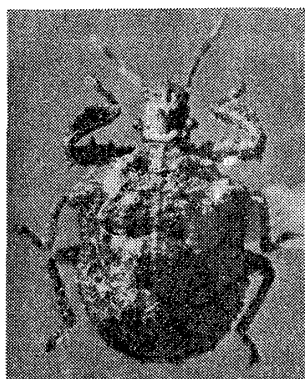
These pictures show the peculiar attitude of the male insect holding up the abdomen with its remarkable white appendages obliquely from the body. Photographs were taken by Shigeo Eda, on July 29th (A) and Aug. 24th (B), 1955, in a valley of Mt. Tsukuba, Ibaragi Prefecture.

Neocazira confragosa Distant の再発見

(Hemiptera, Pentatomidae)

江 崎 悌 三

Distant が 1883 年に日本から新属新種として記載、図示した *Neocazira confragosa* Distant という変つたカメムシがある (Trans. ent. Soc. London 1883: 420, pl. 19, fig. 2).



2). その type locality は肥後湯山で George Lewis の採集品であるから、確かに日本産のものに違いないが、その後今日まで嘗て再び採集され、記録されたことがない。私は British Museum にある type を 1926 年に調べてその写真をし、1953 年に再びその標本に再会して、私の生涯の中に日本からこの種を再び発見するのは望み少いことのように思つたりした。ところが図らずもこの大珍種が最近に富永義昭氏によつて採集され、その貴重な標本が神谷寛之氏の尽力で九州大学昆虫学教室に贈られた。一見あまり見栄えのしない昆虫であるが、前胸部と小楯板に変つた隆起があり、ことに小楯板は大きく腹端に達している。また前脚も奇形を呈している。

その採集記録は次の通りである。

1 ♂, 11. x. 1955, 大隅佐多岬, 富永義昭採集。同氏は樹上の叩網によつて採集したもの由で、ここにその写真を示しておく。

Distant は *Cazira* と比較して新属 *Neocazira* を創設したが、*Cazira* は台湾などに産する Asopinae の一属で、肉食である。*Neocazira* はこれとは全然異つた亜科のもので、Kirkaldy は 1909 年に *Neocazira* と *Hilrya* Schouteden, 1905 とが同属であるとした (Cat. Hem. 1: 230, 1909). *Hilrya* はジャワ産の *H. tibialis* Schouteden, 1905 を type として、記載された属で、Schouteden はそれを Graphosomatinae のものとした (Ann. Soc. ent. Belgique 49: 142, 1905; Gen. Ins., fasc. 30: 9-10, pl. 2, fig. 11, 1905). この *tibialis* と *confragosa* とは一見かなり違つて見えるが、近縁であることは確かで、従つて *Hilrya* は今日では *Neocazira* の synonym とされている。Lewis が 1881 年 5 月中旬に湯山で唯一頭採つて以来 3/4 世紀を経て、本種が再び南九州で発見された喜びを記し、この標本を寄贈された富永義昭氏と神谷寛之氏に深謝する。